# ごあいさつ

この度、今日のドローイング像を紐解く連続企画の第 1 回として、小林夏美と松田啓佑による 2 人展「Draw-ing：境界を漂う―開かれた布置」を開催いたします。

本展では、モノプリントによる版画制作を展開する小林夏美と、ペインティング・陶器による制作を展開する松田啓佑の作品を紹介します。

小林夏美は、記憶や感覚を抽象化し、リトグラフを基にした脆弱な自作の版を用いて、画面に定着させることを試みています。松田啓佑は、理性的な構造としての絵画とは異なるアプローチで、色彩や大胆な筆致によるストロークを通じた絵画表現に取り組んでいます。

一見したところでは、非常に感性的に見える両者の作品ですが、不可視の存在を含め、確かな経験に基づいた具体的なモティーフを用いたイメージが生成されています。色彩の選択やフォルムからも、その一端を読み取ることは可能でしょう。一方、刷る・描く・擦る・剥がすといった一連の制作行為の痕跡は、理性的かのように思われる視覚イメージを超え、事物同士が関わりあう中で偶発的に生まれたものでもあります。この展覧会では、両者の作品における視覚的側面にとどまらず、物質的な側面にも注目し、線描にとどまらない線“的”性質を備えたドローイング像を再考してみようと思います。

また会場内では、東京都江戸東京博物館・小川綾子氏による論考「拡張するドローイング」もご覧いただけます。現代美術において、「線」を核とした表現として、広く受け入れられつつあるドローイング。1960 年代を起点に、現代に至るまでの変遷を丁寧に振り返り、今日の在りようを探る内容となっています。

最後になりましたが、出展作家のお二人をはじめ、本展の開催にあたり貴重なご助言、ご協力を賜りました関係者各位に、深く感謝申し上げます。

2025 年 9 月

主催者